

4. 大震災から学んだことを、自分のため、隣人のため、社会のために

日本列島では1978年の宮城県沖地震に続く2008年岩手宮城内陸地震、2011年東日本大震災の間、およびその後も各地で中規模地震が発生しています。加えて、豪雨による災害も重なって、まさに災害列島で暮らしていることを実感しますが、残念ながらのど元過ぎると、平時の暮らしの方に重心が移ってしまって、やや災害への関心が薄れてしまいます。そして、よそでの災害が報道されると、ふっと思いが呼び起されはしますが、またすーと消えてしまうというような気がします。

私たちは、災害の経験を重ねる中で、防災力の質の向上が確実に図られているのだろうかと思います。経験をどう生かすか、次世代へどう伝えていくか、なぜこうも災害のたびに被害や犠牲者が出るのだろうかと思います。これまでもハード対策も進み、情報提供も進化してきているし、地域での防災力向上が図られ、ハザードマップも整備されているのに、です。災害は繰り返されるものの、日常的なものでないがために、その経験が当事者を除いては風化していくという宿命にあります。特に、大きな災害の後ではすさまじいほどの勢いで復旧や復興が行われて、まるで災禍を隠すように様々なものが作られていきます。外から訪れる人にとっては、完全復興のようにも思えてしまいます。震災遺構や記念公園はあっても被災者と共有することのむずかしさを感じてしまいます。

東日本大震災の時を思い出すと、確かに未曾有の規模で被害も想像を絶するもので、現地に行っても右往左往、何がどうなっているのかその惨状にのまれてしまうほどでした。復旧には多くの人がかかわり、言葉にはつくせない人的、物的支援をいただきました。しかし、ここで次世代へつなぐという意味で、反省すべきことというか次世代へ伝えておかなければならないことも多くありました。

災害復旧や復興ということで、住民を無視した行政の縦割りをあらわにした政策を実施したことです。これは、地域の文化や風土、コミュニティを破壊しました。つまり予算消化でもするかのように、後先のない計画が実施されたことです。いかにも、復旧のように見えて、実は中長期の計画がないことや先を見た地域づくりを無視したものでした。被害地域への居住制限、道路はかさ上げ、いらぬものまで含めた防潮堤、生活実態を無視した高台移転、地域特性を無視したというか住民なしの地域計画、縦割りのな予算確保などが横行し、終わってみれば地域や住民を無視した博覧会の会場化してしまい、コミュニティの復元は難しく、災害の風化を促進してしまいました。行政の自己満足だけが横行して、災害復興とは言えないようなものに見えるのは大変残念です。

そうなった背景には、災害の復旧は急いでも復興はじっくりと住民を主役に進めるということを忘れてしまったことにあります。住民の生活は、行政が考えるような一遍なものでは解決するものではないからです。時間をかけて、住民が地域の歴史やコミュニティの復活を支援するぐらいの待ち時間がなければなりません。復興予算は消化するものではなく、地域で活かすものにする必要がありますし、風化防止にもなります。防潮堤を作って住民を遠ざけるのではなく、自然と共生する知恵や工夫こそが必要だと思います。